民が大いに憤って、涙にむせびながら、あの二人の大逆不道の逆賊の霊魂も、いま王と一しょに祭礼を受けることを口惜しがった。だがそれはどうにも仕方のないことであった。

その後に皇后と多くの王妃の車だ。人民は彼女たちを見たし、彼女たちも人民を見て、ただ泣くばかりだ。その後には大臣、側役人、ちんちくりんなどの輩（やから）で、みんな哀しそうな顔つきをつくっていた。だが人民はもう彼等の方を見なかったし、行列も目茶目茶に乱れて、くずれてしまっていた。

（一九二六年十月作）

鋳剣（注）

一

眉間尺（みけんじゃく）はいまし方、彼の母親とともに寝たところだが、鼠が出てきて鍋の蓋を噛り、その音がうるさくてたまらない。彼は低い声で何度もシーッシーッと叱った。最初はそれでもいくらか効目があったが、後になるとまったく彼にとり合わないで、ガリガリと噛りつづける。彼は思いきり大声を出して追っ払うこともできなかった、昼間の仕事の疲れで、夜は横になるとすぐ寝入ってしまっている母親が吃驚して眼をさますのを気づかって。

ずいぶん時間がたってから、静かになった。彼は眠ろうと思った。突然、ボトンという音がした、驚いて彼はまた眼をあけた。同時にサーサーという音がきこえた、爪で土器をひっかく音である。

「ほれ！　ざまア見ろ！」と彼は思って、一人で大へん愉快になり、そっと起き上った。

（注）初め『眉間尺』と題して雑誌に発表し、のち『鋳剣』と改題して『故事新編』に入れた。訳者はこの編の出典について原作者に訊ねたところ「根拠は忘れて仕舞いました、幼い時に読んだ本から取ったのだから、恐らく『呉越春秋』か『越絶書』の中にあるだろうと思います」という返事であった。『呉越春秋』（漢の趙煜の作）や『越絶書』（漢の袁康の作）の中にもこの話に似た断片的な叙述は見えるが、筋は全くちがっている。魯迅が編校した『古小説鉤沈』の中の『列異伝』（魏の曹丕の作ともいう）に見るものがストーリーを形成している。またそれよりやや詳しく書かれているのは『捜神記』（晋の干宝の作）に見るものだ。

わが国にも眉間尺の話は早く伝えられて、『法苑珠林』（唐の釋道世の編著）から採ったと思われるが『今昔物語』（巻九、第四十四話）の中に見え、また『太平記』（巻十三）『曽我物語』（巻四）『宝物集』（巻五）にもこの話が見える。

鋳剣

作　魯迅
訳　増田渉

二〇一五年六月二〇日発行◉鋳剣（中綴じ版）◉作・魯迅（訳・増田渉）◉二〇一五年度神戸芸術工科大学「組版・タイポグラフィ論」第9回・第10回授業（担当・前田年昭）

彼は寝台からとび下りると、月の光を頼りに裏口に行って点火の道具をさがし、松明に火をつけて、水甕の内側を照らしてみた。果して一匹の大きな鼠が中に落ちていた。だが、中の水が少なくなっていたので、匍い出すことができず、ただ水甕の内側に沿うて、ひっかきながら、ぐるぐる廻るばかりである。

「いい気味だ！」彼は毎夜、毎夜、家具類を噛り、さわがしくて安眠もできないのはこいつらの仕業だと思うと、とても気持ちがスウーとした。彼は松明を土壁の小さな穴に挿しこんで、見物していた。そうするとそのつぶらな小さい眼が、彼に憎しみを起させた、手を伸ばして一本の芦（燃料としてとっておいてある）を抜き出すと、鼠を水の底へグイと押し沈めた。しばらくたって、手をゆるめると、鼠は同時にまた浮び上ってきて、やっぱり甕の内側をひっかきながらぐるぐる廻った。だがひっかき方には前ほどの力はなく、眼も水の中につかり、ただ尖った真赤な小さい鼻先だけをポツンと出して、チューチューと気ぜわしく途切れがちに呼吸した。

彼は近ごろあまり赤い鼻の人間を好まないふうがあった。だがいまその尖った小さな赤い鼻をみると、ふと可哀そうな気がして、すぐにまたその芦の棒を、鼠の腹の下まで差し込んでやった。鼠はひっかきながら、ウンと力を出して、芦の棒を伝わって匍い上った。彼は鼠が全身——濡れてべとべとになった黒い毛、大きな腹、蚯蚓（みみず）のような尻尾——をあらわにしたところを見ると、また腹立たしく憎らしさを覚えて、急に芦の棒を一ふりすると、ボトンと音がして、鼠はまた水甕の中に

胡麻塩であったのだから、黒いのも処置にむずかしかった。夜半ちかくまで討論して、何本かの赤いアゴ髯を選び出したものの、間もなく九番目の妃から抗議が出た、彼女は王に何本かの真黄色いアゴ髯があるのを見たことがある、いま一本も赤いのはなかったとどうしていえようかというのである。そこでまた元のとおり一しょにしたままで、懸案としておくより仕方がなかった。

夜半すぎても、まだ何の結論もでない。人々はそれでもあくびをしながら討論を続けたが、二番鶏が鳴くときになって、やっと一つの最も慎重で妥当な方法が決定された。それは、三つの頭蓋骨と王の胴体とを一しょにして金の棺に入れて埋葬するしか仕方がないということであった。

七日後が葬儀の日で、全城下は大へんな雑踏であった。城内の人民も、遠くの村々の人民も、みんな駈けつけて国王の「大葬」を拝観した。夜があけると、道路はもう人々の群れが押すな押すなで、その間にはまたたくさんの祭卓がおかれていた。午まえになって、やっと先払いの騎士が手綱をゆるめてやってきた。それからまた大ぶんたって、儀仗が見えた、旗、棍棒、戈、戟、弓、大弓、黄金の鉞（まさかり）などといった類である。その後が四輛の楽隊車である。さらにその後から黄色い蓋（ほろ）がでこぼこ路のために上ったり下ったりしながら、だんだんこちらへ近づいてきた。こうして霊柩車はあらわれたのだが、上には金の棺をのせている、棺の中には三つの頭と一つの胴体がいれられて。

人民たちが一せいに土下座すると、祭卓は一列になって人群れの中にあらわれ出た。幾人かの義

民が大いに憤って、涙にむせびながら、あの二人の大逆不道の逆賊の霊魂も、いま王と一しょに祭礼を受けることを口惜しがった。だがそれはどうにも仕方のないことであった。

その後に皇后と多くの王妃の車だ。人民は彼女たちを見たし、彼女たちも人民を見て、ただ泣くばかりだ。その後には大臣、側役人、ちんちくりんなどの輩で、みんな哀しそうな顔つきをつくっていた。だが人民はもう彼等の方を見なかったし、行列も目茶目茶に乱れて、くずれてしまっていた。

（一九二六年十月作）

（注）初め『眉間尺』と題して雑誌に発表し、のち『鋳剣』と改題して『故事新編』に入れた。訳者はこの編の出典について原作者に訊ねたところ「根拠は忘れて仕舞いました、幼い時に読んだ本から取ったのだから、恐らく『呉越春秋』か『越絶書』の中にあるだろうと思います」という返事であった。『呉越春秋』（漢の趙煜の作）や『越絶書』（漢の袁康の作）の中にもこの話に似た断片的な叙述は見えるが、筋は全くちがっている。魯迅が編校した『古小説鉤沈』の中の『列異伝』（魏の曹丕の作ともいう）に見るものがストーリーを形成している。またそれよりやや詳しく書かれているのは『搜神記』（晋の干宝の作）に見るものだ。

わが国にも眉間尺の話は早く伝えられて、『法苑珠林』（唐の釋道世の編著）から採ったと思われるが『今昔物語』（巻九、第四十四話）の中に見え、また『太平記』（巻十三）『曽我物語』（巻四）『宝物集』（巻五）にもこの話が見える。

鋳剣

作　魯迅　訳　増田渉

鋳剣（注）

一

眉間尺（みけんじゃく）はいまし方、彼の母親とともに寝たところだが、鼠が出てきて鍋の蓋を噛り、その音がうるさくてたまらない。彼は低い声で何度もシーッシーッと叱った。最初はそれでもいくらか効目があったが、後になるとまったく彼にとり合わないで、ガリガリと噛りつづける。彼は思いきり大声を出して追っ払うこともできなかった、昼間の仕事の疲れで、夜は横になるとすぐ寝入ってしまっている母親が吃驚して眼をさますのを気づかって。

ずいぶん時間がたってから、静かになった。彼は眠ろうと思った。突然、ボトンという音がした、驚いて彼はまた眼をあけた。同時にサーサーという音がきこえた、爪で土器をひっかく音である。

「ほれ！　ざまア見ろ！」と彼は思って、一人で大へん愉快になり、そっと起き上った。

彼は寝台からとびおりると、月の光を頼りに裏口に行って点火の道具をさがし、松明に火をつけて、水瓶の内側を照らしてみた。果して一匹の大ねずみが風船の中に落ちていた。だが、中の水がちょっぷちゃぷいっているので、側に出すことができず、ただ水瓶の口側に沿って、ひっかきながら、くるくる廻るばかりである。

「こいつ気味だ！」彼は母親、家族親類を驚ろ、ますますしゃべって安眠をさまたげるのはこいつのせいだと思った。仕業だと思らして、とても気持ちがスカーッとした。彼は松明を土壁のうえに立て、見物しているうちに、ねずみは出ようと、風を水の底へ吹くように押し付けて眼が、彼に向って睨みつけた。しばらくたって、手を伸ばして一本の竹（訳注）を抜き出すと、風を水の底へ吹くように押しつけて、ねずみは出ようとしてもがいて、ぶくぶくと泡を吹いた。

一〇一五年十月一〇日発行●鋳剣（中篇じ版）●作・魯迅（訳・増田渉）●二〇一五年度神戸芸術工科大学「組版・タイポグラフィ論」第9回・第10回授業（担当・前田年昭）

落ちた。つづけて彼は芦の棒でもって鼠の頭を何度も小突いて、それを素早く沈めてしまった。
六回、松明をとりかえた後、鼠はもう動かなくなった。だが水の中に沈みながらも、時々また水面に向ってちょっと跳びあがろうとする。眉間尺はまた可哀そうな気がして、すぐ芦の棒を二つに折り、手間をかけてどうにか鼠を挾んで取り出して、地面においた。鼠ははじめちっとも動かなかったが、やがてやっと少し呼吸をした。それからまた大分たって、四つの脚をバタバタ動かし、ふと身をひるがえしたかと思うと、起き上って逃げ出そうとするようだ。それは眉間尺を吃驚させ、思わず左脚をあげて、イキナリ踏みつぶした。チューという声がしたので、彼は蹲んでよく見ると、口ばたに微かに真赤な血が出ていた、多分死んでしまったのだろう。
彼はまたひどく可哀そうな気がした。何だか自分が大悪事でも犯したように思われて、とても堪え難い気持ちであった。彼は蹲んだまま、気抜けしたように見まもって、立ち上らない。
「尺や、お前何をしているのだね？」と彼の母親はもう眼をさまして、寝台の上からたずねた。
「鼠が……」と彼はあわてて立ち上ると、身体をねじ向けて、ただそれだけ答えた。
「そうさ、鼠のことは分っている。だがお前は何をしているのだね。それを殺しているのか、それとも助けているのか？」
彼は返事をしなかった。松明はもう燃えつくしてしまった。彼は黙ったまま暗がりの中に立っていたが、やがて、月光のきれいにかがやいているのを見た。

「ああ！」と彼の母親は溜息をついていった。「子の刻になったら、お前はもう十六歳だ、それだのに性質はそんなふうで、冷いのでもなければ熱いのでもなく、ちっとも変らない。思えば、お前の父の仇は誰も討つものがいない」
彼は母親が灰白色の月かげの中に坐わっているのを見た、何だか身体がふるえているようだ。低い声の中には無限の悲しみがこもっていて、彼に身の毛もよだつほど寒気を覚えさせた。だが一瞬のうちに、たちまちまた全身に熱血が沸き立つような気がした。
「父の仇ですって？　父にどんな仇があるのです？」と彼は二、三歩前に出て、吃驚したようにたずねた。
「あるのだよ。そしてお前に仇を討ってもらいたい。わたしはずっと前からお前に知らせようと思っていた、だがお前があまり小さいので話さなかった。いまお前はもう成人したのに、まだそんな性質だ。それで、わたしはどうすればいいのだろう。お前のような性質で、大事を行うことができるだろうか？」
「できます。いって下さい、お母さん。私は改心しますから……」
「もちろん。わたしとしてもぜひ話さねばならぬ。お前きっと改心して……。では、こちらへおいで」
彼はそちらへ行った。母親は寝台の上に端坐している、ほの白い月かげの中で、両眼からキラキ

ラと光を射出す。
「聞くがいい！」と彼女は厳粛にいった、「お前の父はもとは刀鍛冶の名工で、天下第一であった。父の仕事道具をわたしはとっくに売り払って貧乏をしのいできたので、お前はもう何の痕跡も見ることはできない。だが父は世間に唯一無二の刀鍛冶の名工だった。二十年前、王妃が一かたまりの鉄を産みおとした。それはあるとき鉄の柱を抱きかかえて孕んだということだが、純青透明な鉄であった。大王はめずらしい宝ものだと知って、それを用って一口の剣をつくり、それで国を保んじ、それで敵を殺し、それで身を防ごうと考えつかれた。不幸にしてお前の父がそのときちょうど選ばれて、鉄を受けとって家に帰り、夜も日も鍛錬をつづけて、まる三年間の精神をうち込んで、二口の剣を仕上げなされた。
最後の鑪開きのその日こそ、どんなに人を驚かす光景であったことか！　グヮラグヮラと一面に白い蒸気が立ちのぼったとき、地面も動揺するかと思えた。その蒸気は天空の半ほどで白雲に変わり、この家に蔽いかぶさり、次第に薄赤い色になって、一切のものみなを桃の花のように映し出した。わが家の真黒な鑪の中には、真赤な二本の剣が横たわっていた。お前の父が清い井戸水をゆっくり滴らすと、その剣はスウースウーと唸りながら次第に青色に変って行った。このようにして七日七夜たつと、剣は見えなくなったが、よく見ると、やっぱり鑪の底にあった。純青で、透明で、まるで二すじの氷のように。

大歓喜のかがやきが、お前の父の眼からあたりに射出された。父は剣をとり上げて、拭きに拭いた。だが悲惨の皺が、また父の眉と口とにあらわれた。父はその二口の剣をそれぞれ別にして二つの箱におさめた。
『この数日間の光景をみただけで、誰にもよく分る、剣はもう出来あがったことが分る』と父は愁わしそうにわたしにいった、『明日になれば、必ず行って大王に献上せねばならぬ。だが剣を献上する日は、つまりわしの命の尽きる日だ、われわれはこれで永遠に別れねばならぬだろう』
『あなたは……』とわたしはことの意外に驚いて、父のいう意味をはかりかね、どういえばいいのか分らなかった。ただわたしはこういうだけだった、『あなたはこの度、これほど大きな功労をたてなされて……』と。
『ああ！　お前にどうして分ろう！』と父はいった、『大王は生まれつき、猜疑心がつよく、また残忍だ。この度、わしは大王のために世間に二つとない剣をつくり上げたが、大王はきっとわしを殺してしまうだろう、わしが再び別の人のために、大王に匹敵する、あるいは大王に勝る剣をつくることのないように』
わたしは涙を流した。
『お前悲しまないでくれ。これは避ける方法はない。涙は決して運命を洗い落すことはできない。わしはだがもうここに準備しておいた！』と父の眼から突然、稲妻のような光がかがやいて、

は眼はねじけ鼻はくずれ、顔じゅうが鱗のような傷であった。初めのうちはまだ鼎の中をあちらこちらところげ廻っていたが、後になるとただじっと横たわったまま呻くばかりで、最後には一声も立てず、ただ息を吐くだけで、吸うことはできなくなった。
黒色の男と眉間尺の首もやがて口を閉じて、王の首から離れ、鼎の内側に沿うて一まわり游泳し、王の首が死んだふりをしているか、本当に死んだのかを確かめた。王の首はもう息の絶えたことが分ると、四つの眼と眼が互に見合って、かすかに笑うと、すぐに眼を閉じ、仰向いたまま、鼎の底に沈んで行った。

四

煙は消え火は絶えた、鼎の水は静まった。特別の静寂が居合わせた人々の心を呼び醒ました。彼等の中の一人がまず叫び声をあげると、たちまち誰も彼も続けさまに驚きの叫びをあげた。一人の者が金の鼎のところへ大股に進みよると、人々は我先きに一かたまりになってワッとかけ寄った、押しのけられて後の方にいたものは、人の首すじの隙間から向うをのぞき込むばかりであった。
熱気はまだ人々の顔を火照らして焼けるばかりだ。鼎の中の水はしかし鏡のように平かで、その上には薄い層になって油が浮き、いろいろな人たちの顔を映し出した、皇后、妃、武士、老臣、小人、側役人……。

「アア、天よ！　われらの大王の首はまだこの中にあるのだ、アイアイアイ！」と六番目の妃が突然、発狂したように泣き騒いだ。
上は皇后から下はお伽の臣にいたるまで、みなハッと気がついて、そそくさと散らばって行ったが、あわてふためいてどうしていいか分らず、めいめいに四つ五つもぐるぐる廻りをした。一人の、最も知恵才覚のある老臣がまたひとりで前にすすみ出て、手を伸して鼎のフチのところをちょっと触ってみて、そして全身をブルッとふるわせると、そのまま引きさがって、二本の指を伸し、口のところへ持って行っていつまでもフウフウ吹いていた。
人々は気を取りなおして、宮殿の門の外で撈いあげる方法について相談した。およそ三度も粟飯が煮えるほどの時間をかけて、とにかく一つの結論に到達したわけだが、それは、料理部屋から金網の杓子をあつめてきて、武士に命じ力をあわせて撈いあげるというのであった。
道具はやがて集められた、金網の杓子、底に孔をあけた杓子、金の盆、雑巾などが鼎のそばに置かれた。武士たちは着物の袖をまくり上げて、金網杓子やら、孔あき杓子やらで、一せいにうやうやしく撈いにかかった。杓子と杓子とが触れあう音、杓子が金の鼎をこする音。水は杓子がかきまぜられるに随ってぐるぐる廻った。しばらくやっていたが、一人の武士の顔が突然、生真面目になり、用心ぶかく両手でゆっくりと杓子をもち上げた。水は杓子の孔から珠のように漏れて行き、杓子の中には真白な頭蓋骨があらわれた。人々は驚きの叫びをあげた。彼はその頭蓋骨を金の盆にう

つして入れた。
「アア！　わが大王よ！」と皇后、妃、老臣から側役人にいたる類が、みんな声をあげて泣き出した。だが間もなく次々に泣くことをやめた。それは武士がまたもや一つ同じような頭蓋骨を撈いあげたからである。
彼等が涙に曇った眼で、ぼんやりあたりを見廻すと、ただ武士たちだけが顔じゅう油汗を流して、まだ撈っていた。その後で撈い出されたものは一かたまりになったグシャグシャの白い頭髪と黒い頭髪であった、それから何杓子ものこまごまとしたものがあったが、白い鬚と黒い鬚のようであった。その後でまた一つの頭蓋骨。その後では三本の簪。
鼎の中にはもう白湯だけがのこったときに、やっと手をおいた。撈い出された物件は三つの金の盆に分けて盛られた、一つの盆には頭蓋骨、一つの盆には鬚、一つの盆には簪。
「われわれの大王の頭蓋骨は一つしかない。どれがわれわれの大王のものでしょう？」と九番目の妃が焦立たしそうにいった。
「左様でございますね……」と老臣たちはみな顔を見合わせた。
「もし皮や肉が煮えただれていなかったら、たやすく見分けがつきまするが」と一人のちんちくりんが跪いていった。
人々は気を落ちつけて、頭蓋骨を丁寧に見るより仕方がなかった、だが色も大きさも、ほとんど

ちがわない、あの少年の頭さえも見分けがつかなかった。皇后が王の右の額には傷痕が一つある、それは太子のときに趺げてケガをしたからである、恐らく骨にも痕跡があるかも知れないといった。果して、ちんちくりんが一つの頭蓋骨にそれを見つけた。人々が歓喜しているとき、ほかの一人のちんちくりんがまたいくらか黄色がかった頭蓋骨の右額にも似たような痕を見つけた。
「いい方法があります」と三番目の妃が得意そうにいった、「われらの大王の鼻すじはとても高かったわ」
側役人たちはすぐに鼻すじの研究をはじめた、一つのは確かに比較的高いように見えた、だが結局のところいくらの違いもなかったし、最も残念なことは右額の上に趺げた傷の痕跡がないことであった。
「ましてや」と老臣たちは側役人に向っていった、「大王さまの後頭骨はこんなに尖っていたのか知らん？」
「わたくしどもは一向に大王さまの後頭骨を注意して見ることを怠っておりまして……」
皇后と妃たちはめいめいに思い出してみて、あるものは尖っていたといい、あるものは平かだったという。梳あげ役人を呼んできてたずねたところ、彼は一ことも返事ができなかった。
その夜、王公大臣会議が開かれて、どれが王の頭であるかを決定しようとした、だが結果は昼間と同じであった。そのうえ髪や鬚まで問題を起した。白いのはもちろん王のものだとして、しかし

「ああ！」と彼の母親は溜息をついていった。「子の刻になったら、お前はもう十六歳だ、それだのに性質はそんなふうで、冷いのでもなければ熱いのでもなく、ちっとも変らない。思えば、お前の父の仇は誰も討つものがいない」

彼は母親が灰白色の月かげの中に坐わっているのを見た、何だか身体がふるえているようだ。低い声の中には無限の悲しみがこもっていて、彼に身の毛もよだつほど寒気を覚えさせた。だが一瞬のうちに、たちまちまた全身に熱血が沸き立つような気がした。

「父の仇ですって？　父にどんな仇があるのです？」と彼は二、三歩前に出て、吃驚したようにたずねた。

「あるのだよ。そしてお前に仇を討ってもらいたい。わたしはずっと前からお前に知らせようと思っていた、だがお前があまり小さいので話さなかった。いまお前はもう成人したのに、まだそんな性質だ。それで、わたしはどうすればいいのだろう。お前のような性質で、大事を行うことができるだろうか？」

「できます。いって下さい、お母さん。私は改心しますから……」

「もちろん。わたしとしてもぜひ話さねばならぬ。お前きっと改心して……。では、こちらへおいで」

彼はそちらへ行った。母親は寝台の上に端坐している、ほの白い月かげの中で、両眼からキラキラして入れた。

「アア！　わが大王よ！」と皇后、妃、老臣から側役人にいたる類が、みんな声をあげて泣き出した。だが間もなく次々に泣くことをやめた。それは武士がまたもや一つ同じような頭蓋骨を捞いあげたからである。

彼等が涙に曇った眼で、ぼんやりあたりを見廻すと、ただ武士たちだけが顔じゅう油汗を流して、まだ捞っていた。その後で捞い出されたものは一かたまりになったグシャグシャの白い頭髪と黒い頭髪であった、それから何杓子ものこまごまとしたものがあったが、白い鬚と黒い鬚のようであった。その後でまた一つの頭蓋骨。その後では三本の簪。

鼎の中にはもう白湯だけがのこったときに、やっと手をおいた。捞い出された物件は三つの金の盆に分けて盛られた、一つの盆には頭蓋骨、一つの盆には鬚、一つの盆には簪。

「われわれの大王の頭蓋骨は一つしかない。どれがわれわれの大王のものでしょう？」と九番目の妃が焦立たしそうにいった。

「左様でございますね……」と老臣たちはみな顔を見合わせた。

「もし皮や肉が煮えただれていなかったら、たやすく見分けがつきまするが」と一人のちんちくりんが跪いていった。

人々は気を落ちつけて、頭蓋骨を丁寧に見るより仕方がなかった、だが色も大きさも、ほとんど

大歓喜のかがやきが、お前の父の眼からあたりに射出された。父は剣をとり上げて、拭きに拭いた。だが悲惨の皺が、また父の眉と口とにあらわれた。父はその二口の剣をそれぞれ別にして二つの箱におさめた。

『この数日間の光景をみただけで、誰にもよく分る、剣はもう出来あがったことが分る』と父は愁わしそうにわたしにいった、『明日になれば、必ず行って大王に献上せねばならぬ。だが剣を献上する日は、つまりわしの命の尽きる日だ、われわれはこれで永遠に別れねばならぬだろう』

『あなたは……』とわたしはことの意外に驚いて、父のいう意味をはかりかね、どういえばいいのか分らなかった。ただわたしはこういうだけだった、『あなたはこの度、これほど大きな功労をたてなされて……』と。

『ああ！　お前にどうして分ろう！』と父はいった、『大王は生まれつき、猜疑心がつよく、また残忍だ。この度、わしは大王のために世間に二つとない剣をつくり上げたが、大王はきっとわしを殺してしまうだろう、わしが再び別の人のために、大王に匹敵する、あるいは大王に勝る剣をつくることのないように』

わたしは涙を流した。

『お前悲しまないでくれ。これは避ける方法はない。涙は決して運命を洗い落すことはできない。わしはだがもうここに準備しておいた！』と父の眼から突然、稲妻のような光がかがやいて、

は眼はねじけ鼻はくずれ、顔じゅうが鱗のような傷であった。初めのうちはまだ鼎の中をあちらこちらところげ廻っていたが、後になるとただじっと横たわったまま呻くばかりで、最後には一声も立てず、ただ息を吐くだけで、吸うことはできなくなった。

黒色の男と眉間尺の首もやがて口を閉じて、王の首から離れ、鼎の内側に沿うて一まわり游泳し、王の首が死んだふりをしているか、本当に死んだのかを確かめた。王の首はもう息の絶えたことが分ると、四つの眼と眼が互に見合って、かすかに笑うと、すぐに眼を閉じ、仰向いたまま、鼎の底に沈んで行った。

四

煙は消え火は絶えた、鼎の水は静まった。特別の静寂が居合わせた人々の心を呼び醒ました。彼等の中の一人がまず叫び声をあげると、たちまち誰も彼も続けさまに驚きの叫びをあげた。一人の者が金の鼎のところへ大股に進みよると、人々は我先きに一かたまりになってワッとかけ寄った、押しのけられて後の方にいたものは、人の首すじの隙間から向うをのぞき込むばかりであった。

熱気はまだ人々の顔を火照らして焼けるばかりだ。鼎の中の水はしかし鏡のように平かで、その上には薄い層になって油が浮き、いろいろな人たちの顔を映し出した、皇后、妃、武士、老臣、小人、側役人……。

やがやがいい、あの今年の頭をみるも見分けがつかないほどだった。皇后が王の右の額には傷痕が一つあって、それは大王の十のときに跳ねられたものだった。恐らく骨までも痕跡があるかも知れない。果して、ちょうどくるくるがまたいくつかの頭蓋骨にそれを見つけた。人々は歓喜っていると、ほかの一人の男が叫び出した。

「いっか法がありました」と二番目の妃が得意そうにいった、「おうちの大王の眉をも見つけました」

側役人たちがすぐに鼎ごの研究をはじめた、一つのは確かに比較的高いように見えた、だが結局のところいくつの違いもなかったし、最も疑念なことには右額の上に跛けた傷の痕跡がないことだが、やはり、月光のきれいだがはいっているのを見た。

ドドン、天よ！　われらの大王は本当に死なれたのだ、ドドドドドドー」と番目の妃がいった。

上は皇后から下は本物の臣にいたるまで、みんないっせいに四つ足つきで廻りをした。一人の者が金の鼎のところへ大股に進みよると、人々は我先きに一かたまりになって、ワッとかけ寄った、押しのけられて後の方にいたものは、人の首すじの隙間から向うをのぞき込むばかりであった。

熱気はまだ人々の顔を火照らして焼けるばかりだ。鼎の中の水はしかし鏡のように平かで、その上には薄い層になって油が浮き、いろいろな人たちの顔を映し出した、皇后、妃、武士、老臣、小人、側役人……。

ラッと光を発出す。

「聞くなかれ！」と彼女は厳粛にいった、「お前の父はとっくに死んでいるのだ、天下第一であるべき仕事道具をかたしたとっくに死んでいるのだ、お前はもう何の痕跡も見ることはできない。だが父は世間に唯一無二の刀鍛冶の名工だった。二十年前、王妃が一ぱいにうめた鉄を産み出すとき、大王はあるとき鉄の性を抱きながらも、ただ一口の剣をつくり、それを国を保ち、用心深く隠しておくべきの剣だと知って、それを用いて一口の剣をつくり、それを前の父がその子のために残されたのだ。不幸にして前の父がその子のために残された、夜も日も鍛錬をつづけて、まる三年間の精神をもり込んで、二口の剣を仕上げられた。

最後の鑪開きのその日に、どんなに人を驚かす事であったことか！　ダラダラと一面に日ごろの素質が出からなくて、地面も動揺するかと思えた。その蒸気は天空の半ばを白雲に変わり、っの家に蔽いかぶさって、炎焔に焼赤い色になって、一切のものをみな焼の花のように照し出した。わが家の真っ赤な鑪の中には、真赤な焼赤い剣が横たわっていた。お前の父がこの清い井戸水をかけ、くり返すと、その剣は見えくなった。すぐ剣の身の紫色に変っていった。このようにしては日七夜たった、剣は見えくなったが、すぐ見ると、やっぱり鑪の底にあった。純青で、透明で、まるでガラスのようだ。

「そうだ、風のことは分っている。だがお前は何をしているのだね。それを殺しているのが、それも助けているのだ。お母様はもう然るべくしてしまった。彼は然ったまま暗がりの中に立っていたが、やがて、月光のきれいだがはいっているのを見た。

彼は返事をしなかった。だが、ただ、「大王はいってい た、「大王はまの後頭骨はこんなに光っているのが知るべ。」

「みたくしどもは一同に大王はまの後頭骨を注視して見ることをやっていまりまして……」

皇后に促されながらいまに思いを出してみて、あるものは笑っていたといい、あるものは平がいったいう。そのあと、王公貴族人を呼び、それがいたるところ、彼は一っとも返事をなかった。

「風……」と彼はもう然るべくしてしまった。彼は一っとも返事をなかった。

「風が……」と彼はもいっていたのだ。「風の母親はもう然るべくして、寝台の上ちらへおいで」

彼はそちらへ行った。母親は寝台の上に端坐している、ほの白い月かげの中で、両眼からキラキラして入れた。

「アア！　わが大王よ！」と皇后、妃、老臣から側役人にいたる類が、みんな声をあげて泣き出した。だが間もなく次々に泣くことをやめた。それは武士がまたもや一つ同じような頭蓋骨を捞いあげたからである。

彼等が涙に曇った眼で、ぼんやりあたりを見廻すと、ただ武士たちだけが顔じゅう油汗を流して、まだ捞っていた。その後で捞い出されたものは一かたまりになったグシャグシャの白い頭髪と黒い頭髪であった、それから何杓子ものこまごまとしたものがあったが、白い鬚と黒い鬚のようであった。その後でまた一つの頭蓋骨。その後では三本の簪。

鼎の中にはもう白湯だけがのこったときに、やっと手をおいた。捞い出された物件は三つの金の盆に分けて盛られた、一つの盆には頭蓋骨、一つの盆には鬚、一つの盆には簪。

「われわれの大王の頭蓋骨は一つしかない。どれがわれわれの大王のものでしょう？」と九番目の妃が焦立たしそうにいった。

「左様でございますね……」と老臣たちはみな顔を見合わせた。

「もし皮や肉が煮えただれていなかったら、たやすく見分けがつきまするが」と一人のちんちくりんが跪いていった。

人々は気を落ちつけて、頭蓋骨を丁寧に見るより仕方がなかった、だが色も大きさも、ほとんど

剣をいれた箱をわたしの膝の上においた。『これは雄剣だ』と父はいった、『お前これをしまってお け。明日、わしはこの雌剣だけを大王のところへ持って行く。もしわしが行ったまま帰ってこなかったならば、わしはきっともうこの世にはいないのだ。お前は身ごもってもう五、六か月になるではないか、悲しむことはない、子供が産まれたら大切に育てるのだ。成人になったときに、お前は子供にこの雄剣を手渡して、大王の首を斬らせ、わしのために仇を討たせるのだ！』と」

「その日、父は帰ってこなかったのですか？」と眉間尺はせき込んでたずねた。

「帰ってこなかった！」と母親は冷静にいった、「わたしはあちこち聞いて廻ったが、まるで消息はなかった。後に人からきいたところでは、お前の父のつくった剣に、最初に血を飲ませたのは、つまりその人自身――お前の父親であった。そして父親の幽魂が祟りをするのを怕れて、その胴体と首とを別々に、門前と裏庭に埋めたということだ！」

眉間尺は突然、全身が猛火に焼かれるようで、自分でも毛髪の一本一本からまるで火の玉がきらめき出すような気がした。彼の二つの握りこぶしは、暗がりの中でガクガクと鳴りひびいた。

母親は立ち上って、寝台のところの木板を取りはずし、寝台を下りて、松明をつけ、裏口に行って鋤をとってきて、それを眉間尺に渡していった、「掘ってごらん！」

眉間尺は心臓がドキドキした。だが落ちついて一鋤一鋤しずかに掘って行った。出てくるものはみな黄土であったが、およそ五尺ばかりも深く掘って行くと、土の色が少しちがってきた、ボロボ

ロに朽ちた木質のようだった。

「見るのだよ！　気をつけて！」と彼の母親はいった。

眉間尺は掘り開けた洞穴のそばに身を伏せ、手を伸して、用心ぶかく気をつけながらボロボロになった木質をかき分けた、指の先がヒヤッとして、冷い雪にでも触ったかと思ったとき、あの純青透明な剣があらわれたのだ。彼は剣の柄をハッキリ見てとると、それを握って、とり出した。

窓の外の星や月も部屋の中の松明もにわかに光を失ったかのようで、ただ青い色だけが世界を充塞した。剣はこの青い光の中に溶けこんで、見てもそこには何もないようだ。眉間尺は精神をこらしてじっと見た。すると何だか五尺あまりの長さが見えるようであったが、しかしどんな鋭い刃も見えず、刃渡りのところは反ってやや丸みがあり、まるで一枚の韮の葉のようだ。

「お前はこれからお前の優柔の性質を改め、この剣で仇を討ちに行け！」と母親はいった。

「私はもう私の優柔の性質を改めました、この剣で仇を討ちに行きます！」

「これだけがお願いだ。お前は青い着物をきて、この剣を背負えば、着物と剣とは一色で、誰も見分けがつかない。着物はもうわたしはここにつくっておいた、明日になったらお前は出発するがいい。わたしのことは心にかけるでない！」と彼女は寝台の後ろのボロ衣裳箱を指して、いった。

眉間尺は新しい着物をとり出して、試しに着てみると、裄丈けはちょうど合う。彼はまた元のとおりにキチンとたたみ、剣をつつんで、枕もとにおくと、しずかに横になった。彼は自分はもう優

柔の性質を改めたのだと思った。そして何ごとも心にかかることはない気持ちで、枕につくとすぐ眠り、朝早くに眼をさまして、いつもと別に変った様子もなく、しずかに不倶戴天の仇をさがしに出かけようと決心した。

だが彼は眠れなかった。寝返りばかりうつので、いっそ起きあがって坐ろうかと思った。母親の失望したような、ひそやかな長い溜息が聞えた。とうとう一番鶏の鳴くのが聞えて、もう子の刻で、自分は十六歳になったことを彼は知った。

二

眉間尺は眼のフチを腫らしながら、後ろをふり向きもせずに戸外へとび出した。青い着物をきて、青い剣を背負いながら、大股に歩いて、ずんずん城内へ急いだとき、東方にはまだ太陽の光は射していなかった。杉林の一つ一つの葉末には、露の珠がかかっていて、その中には夜気がひそんでいた。だが、杉林を向うへ突き抜けたときは、露の珠はさまざまな輝きをキラキラとさせ、だんだん暁の色合いに変わった。はるか前方を望むと、ほんのりと灰黒色の城壁と姫垣が見える。

野菜売と一しょに城内にまぎれ込んだが、市街はもう大へんな混雑だ。男たちは一ならび一ならびになって、ボンヤリと立っている。女たちも時々戸口の隙間から頭をのぞかせる。彼女たちの多くは眼のフチを腫らしていて、髪の毛は梳かないままでいる、黄ばんだ顔にはまだ化粧もしていな

い。

眉間尺は何か大事件がやってくるであろうことを予感した、彼等はみんな焦々しながら辛棒づよくその大事件を待っているのだと。

彼はそのまま前へ進んでいった。一人の子供が突然走ってきて、ほとんど彼の背中の剣の先にぶつかりそうになったので、彼は吃驚して身体じゅうに冷汗をかいた。北の方に方向をかえて進んだ。王宮の近くになると、人々は押しあいへしあい、ぎっしりと密集して、みんな首を伸している。人むれの中には女や子供の泣きわめく声もまざっていた。彼はその眼に見えない雄剣が人を傷けることを心配して、思い切って割り込んで行けない。だが人々は背後から押しよせてくる。彼はやむを得ず、身をすり抜けて、人ごみを避けて後ろにさがった。眼の前にはただ人々の背中と伸した首が見えるばかりである。

ふと、前の方の人たちがみな続けさまに土下座した。遠くの方から二頭の馬が並んで駆けてきた。その後から棒、戈、刀、弓、旗をもった武士が、路いっぱいにモウモウと砂塵をまいてやってくる。次には四頭の馬が曳く大きな車がきた、その上には一隊の人が坐っていて、あるものは鐘を鳴らし太鼓を打ち、あるものは何というか名前も知れぬ厄介なものを口で吹きならす。その後はまた車だ、中にいる人はみな立派な衣裳をまとっている。老人か、でなければ太っちょで、めいめい顔じゅうに油汗をかいている。つづいてはまた一隊の刀槍、剣戟の騎馬の武士だ。土下座の人たち

黒色の男の歌声が止まったと思うと、その首も熱湯の中央に停止して、顔を王宮の方に向けたが、端然とした重々しい顔色に変った。そのような状態がしばらくつづいてから、はじめてゆるゆると上下に顫動した。顫動から速度を加えて起伏の游泳になった、だがあまり速くはなく、態度はとても悠々としていた。水辺をめぐって、あるいは高くあるいは低く游泳して三回まわると、突然、大きな眼を見はった、漆黒の眼の玉は特別に生き生きとかがやいたが、同時にまた口をあけて歌をうたい出した、

王の恵みは流れるよ、ひろくひろく、
怨敵を克服し、怨敵を克服したよ、何たる強さ！
宇宙には窮りあって、万寿は限りなし。
幸いに我は来たのだ、青きその光！
青きその光よ、永遠に忘られず。
二つになる二つになるのだ、堂々たり！
堂々たりだ、アイアイヨー！
アア帰る、アア償うのだ、青きその光！

首は突然、水の尖端まで昇って停止し、幾つも自己回転をやった後、上下昇降をはじめた。眼の玉を左右に向けてチラリチラリとながめるが、とても美しくなまめかしい、口には相変らず歌をうたう、

アア、アアだ、アア、アア、
愛よアアだ、アア、アア！
血ぬられた一つの首だ、愛よアア。
我は用う一つの首をだ、そして万夫なし！
彼は用う百の首、千の首を……

ここまで歌うと、それは沈んで行くときであったが、もう浮び上って来なくなったばかりか、歌の文句もよくきき分けられなかった。湧き上る湯も、歌声のかすかになるにつれて、だんだん低く弱まって、まるで潮が退くのと同じであった。ついに鼎のフチより下に降り、遠くからは何も見えなくなった。

「どうしたのだ？」としばらく待って、王は我慢できないようにたずねた。

「大王」と黒色の人は半ば跪きながらいった。「首はいまや鼎の底で世にも不思議な団円の舞い

をやっております、そば近く寄らなければ見ることはできません。臣も法術でこれを上に昇らすことはできないのであります、というのは団円の舞をするには必ず鼎の底でなければならないからでございます」

王は立ち上って、金の階段をまたぎ下り、焼けるような熱さを我慢して鼎のそばに立ち止まり、首をのばして覗いた。水は鏡のように平かだ、その首は仰向けになって水中に横たわっている、両眼でまともに王の顔を見ながら。王の眼が首の顔をまっすぐに見すえたとき、首はニッコリ笑った。この笑顔を王はいつかどこかで見覚えがあるように思ったが、しかしまたそれが誰であるかを咄嗟には思い出せなかった。驚きいぶかっているちょうどその時、黒色の男はもう背負うた青色の剣を抜き拂っていた、ただ一ふり、稲妻のように閃いて王の後項窩から切りおろした、ボトンと音がして、王の首はもう鼎の中に落ちていた。

仇同士が顔を合わすと、特別に眼ざといものだといわれるが、ましていま狭い鼎の中での出会いである。王の首が落ちて水面にとどいたかと思うと、眉間尺の首がそれを迎えて、懸命に王の耳輪にガブリと咬みついた。鼎の水はたちまち沸騰して湧きあがり、ザアザアという音がした。二つの首は水中での死闘だ。およそ二十合ばかりの咬み合いで、王の首は五か所に傷をうけたが、眉間尺の首は七か所うけた。王はまたずるかしこくて、いつもうまく立ち廻って、眉間尺の後ろへ廻りこむ。眉間尺はふとした油断から、とうとう王に後項窩に咬みつかれて、どうしても振り切って脱れ

るすべがなかった。そのとき王の首は咬みついて離さず、だんだん咬み進んでいくばかりであった。鼎の外にまで何だか子供の苦痛の叫び声が洩れてくるように思われた。

上は皇后から下はお伽の臣に至るまで、驚愕のあまり凝結していた顔色も、その声に呼びさまされて活動しはじめた。暗く天日のない悲しみを覚えたかのようで、皮膚には一粒一粒と粟を生じた。だがまた秘密の歓喜もまざり合って、眼を見張った、何ごとかを心待ちしているかのように。

黒色の男もいささか驚きあわてているようであった、だが顔色は変えなかった。彼はゆっくりと落ちつきはらって、見ても見えない青い剣を握った腕を大きく伸ばした、まるで一本の枯枝のようだ。首を伸ばして、鼎の底をじっと見ているようであった。腕が突然、曲げられたかと思うと、青い剣はいきなり彼の背後から打ちおろされた、剣がふれると同時に首が落ちて、鼎の中にころげ込み、ポンという音がして、雪白の水しぶきが空中に向って、同時に四方にとびあがった。

黒色の男の首が水にとび込むや否や、そのまま王の首におそいかかり、ガブリと王の鼻に咬みつき、ほとんど咬み切るばかりであった。王は堪えられずして一声「アイヨー」と叫んで口を開けると、眉間尺の首はその機に乗じてもがき脱れ、くるりと向き直ると王の下顎に死ぬほどの力をこめてガッチリ咬みついた。彼等二人とも咬みついて離さないばかりか、ありったけの力を用って上と下に引っぱったので、引っぱられた王の首はもう口を合わせることもできなかった。そこで二人は餓えた鶏が米をついばむように、一しきりそこらじゅう目茶目茶に咬みあらした。咬まれた王の首

ロに朽ちた木質のようだった。
「見るのだよ！　気をつけて！」と彼の母親はいった。
眉間尺は掘り開けた洞穴のそばに身を伏せ、手を伸して、用心ぶかく気をつけながらボロボロになった木質をかき分けた、指の先がヒヤッとして、冷い雪にでも触ったかと思ったとき、あの純青透明な剣があらわれたのだ。彼は剣の柄をハッキリ見てとると、それを握って、とり出した。
窓の外の星や月も部屋の中の松明もにわかに光を失ったかのようで、ただ青い色だけが世界を充塞した。剣はこの青い光の中に溶けこんで、見てもそこには何もないようだ。眉間尺は精神をこらしてじっと見た。すると何だか五尺あまりの長さが見えるようであったが、しかしどんな鋭い刃も見えず、刃渡りのところは反ってやや丸みがあり、まるで一枚の韮の葉のようだ。
「お前はこれからお前の優柔の性質を改め、この剣で仇を討ちに行け！」と母親はいった。
「私はもう私の優柔の性質を改めました、この剣で仇を討ちに行きます！」
「これだけがお願いだ。お前は青い着物をきて、この剣を背負えば、着物と剣とは一色で、誰も見分けがつかない。着物はもうわたしはここにつくっておいた、明日になったらお前は出発するがいい。わたしのことは心にかけるでない！」と彼女は寝台の後ろのボロ衣裳箱を指して、いった。
眉間尺は新しい着物をとり出して、試しに着てみると、裄丈けはちょうど合う。彼はまた元のとおりにキチンとたたみ、剣をつつんで、枕もとにおくと、しずかに横になった。彼は自分はもう優

をやっております、そば近く寄らなければ見ることはできません。臣も法術でこれを上に昇らすことはできないのであります、というのは団円の舞をするには必ず鼎の底でなければならないからでございます」
王は立ち上って、金の階段をまたぎ下り、焼けるような熱さを我慢して鼎のそばに立ち止まり、首をのばして覗いた。水は鏡のように平かだ、その首は仰向けになって水中に横たわっている、両眼でまともに王の顔を見ながら。王の眼が首の顔をまっすぐに見すえたとき、首はニッコリ笑った。この笑顔を王はいつかどこかで見覚えがあるように思ったが、しかしまたそれが誰であるかを咄嗟には思い出せなかった。驚きいぶかっているちょうどその時、黒色の男はもう背負うた青色の剣を抜き拂っていた、ただ一ふり、稲妻のように閃いて王の後項窩から切りおろした、ボトンと音がして、王の首はもう鼎の中に落ちていた。
仇同士が顔を合わすと、特別に眼ざといものだといわれるが、ましていま狭い鼎の中での出会いである。王の首が落ちて水面にとどいたかと思うと、眉間尺の首がそれを迎えて、懸命に王の耳輪にガブリと咬みついた。鼎の水はたちまち沸騰して湧きあがり、ザアザアという音がした。二つの首は水中での死闘だ。およそ二十合ばかりの咬み合いで、王の首は五か所に傷をうけたが、眉間尺の首は七か所うけた。王はまたずるかしこくて、いつもうまく立ち廻って、眉間尺の後ろへ廻りこむ。眉間尺はふとした油断から、とうとう王に後項窩に咬みつかれて、どうしても振り切って脱れ

い。
眉間尺は何か大事件がやってくるであろうことを予感した、彼等はみんな焦々しながら辛棒づよくその大事件を待っているのだと。
彼はそのまま前へ進んでいった。一人の子供が突然走ってきて、ほとんど彼の背中の剣の先にぶつかりそうになったので、彼は吃驚して身体じゅうに冷汗をかいた。北の方に方向をかえて進んだ。王宮の近くになると、人々は押しあいへしあい、ぎっしりと密集して、みんな首を伸している。人むれの中には女や子供の泣きわめく声もまざっていた。彼はその眼に見えない雄剣が人を傷けることを心配して、思い切って割り込んで行けない。だが人々は背後から押しよせてくる。彼はやむを得ず、身をすり抜けて、人ごみを避けて後ろにさがった。眼の前にはただ人々の背中と伸した首が見えるばかりである。
ふと、前の方の人たちがみな続けさまに土下座した。遠くの方から二頭の馬が並んで駆けてきた。その後から棒、戈、刀、弓、旗をもった武士が、路いっぱいにモウモウと砂塵をまいてやってくる。次には四頭の馬が曳く大きな車がきた、その上には一隊の人が坐っていて、あるものは鐘を鳴らし太鼓を打ち、あるものは何というか名前も知れぬ厄介なものを口で吹きならす。その後はまた車だ、中にいる人はみな立派な衣裳をまとっている。老人か、でなければ太っちょで、めいめい顔じゅうに油汗をかいている。つづいてはまた一隊の刀槍、剣戟の騎馬の武士だ。土下座の人たち

黒色の男の歌声が止まったと思うと、その首も熱湯の中央に停止して、顔を王宮の方に向けたが、端然とした重々しい顔色に変った。そのような状態がしばらくつづいてから、はじめてゆるゆると上下に顫動した。顫動から速度を加えて起伏の游泳になった、だがあまり速くはなく、態度はとても悠々としていた。水辺をめぐって、あるいは高くあるいは低く游泳して三回まわると、突然、大きな眼を見はった、漆黒の眼の玉は特別に生き生きとかがやいたが、同時にまた口をあけて歌をうたい出した、

王の恵みは流れるよ、ひろくひろく、
怨敵を克服し、怨敵を克服したよ、何たる強さ！
宇宙には窮りあって、万寿は限りなし。
幸いに我は来たのだ、青きその光！
青きその光よ、永遠に忘られず。
二つになる二つになるのだ、堂々たり！
堂々たりだ、アイアイヨー！
アア帰る、アア償うのだ、青きその光！

首は突然、水の尖端まで昇って停止し、幾つも自己回転をやった後、上下昇降をはじめた。眼の玉を左右に向けてチラリチラリとながめるが、とても美しくなまめかしい、口には相変らず歌をうたう、

アア、アアだ、アア、アア、
愛よアアだ、アア、アア！
血ぬられた一つの首だ、愛よアア。
我は用う一つの首をだ、そして万夫なし！
彼は用う百の首、千の首を……

ここまで歌うと、それは沈んで行くときであったが、もう浮び上って来なくなったばかりか、歌の文句もよくきき分けられなかった。湧き上る湯も、歌声のかすかになるにつれて、だんだん低く弱まって、まるで潮が退くのと同じであった。ついに鼎のフチより下に降り、遠くからは何も見えなくなった。
「どうしたのだ？」としばらく待って、王は我慢できないようにたずねた。
「大王」と黒色の人は半ば跪きながらいった。「首はいまや鼎の底で世にも不思議な団円の舞い

柔の性質を改めたのだと思った。そして何ごとも心にかかることはない気持ちで、枕につくとすぐ眠り、朝早くに眼をさまして、いつもと別に変った様子もなく、しずかに不倶戴天の仇をさがしに出かけようと決心した。
だが彼は眠れなかった。寝返りばかりうつので、いっそ起きあがって坐ろうかと思った。母親の失望したような、ひそやかな長い溜息が聞えた。とうとう一番鶏の鳴くのが聞えて、もう子の刻で、自分は十六歳になったことを彼は知った。

二

眉間尺は眼のフチを腫らしながら、後ろをふり向きもせずに戸外へとび出した。青い着物をきて、青い剣を背負いながら、大股に歩いて、ずんずん城内へ急いだとき、東方にはまだ太陽の光は射していなかった。杉林の一つ一つの葉末には、露の珠がかかっていて、その中には夜気がひそんでいた。だが、杉林を向うへ突き抜けたときは、露の珠はさまざまな輝きをキラキラとさせ、だんだん暁の色合いに変わった。はるか前方を望むと、ほんのりと灰黒色の城壁と姫垣が見える。
野菜売と一しょに城内にまぎれ込んだが、市街はもう大へんな混雑だ。男たちは一ならび一ならびになって、ボンヤリと立っている。女たちも時々戸口の隙間から頭をのぞかせる。彼女たちの多くは眼のフチを腫らしていて、髪の毛は梳かないままでいる、黄ばんだ顔にはまだ化粧もしていな

るすべがなかった。そのとき王の首は咬みついて離さず、だんだん咬み進んでいくばかりであった。鼎の外にまで何だか子供の苦痛の叫び声が洩れてくるように思われた。
上は皇后から下はお伽の臣に至るまで、驚愕のあまり凝結していた顔色も、その声に呼びさまされて活動しはじめた。暗く天日のない悲しみを覚えたかのようで、皮膚には一粒一粒と粟を生じた。だがまた秘密の歓喜もまざり合って、眼を見張った、何ごとかを心待ちしているかのように。
黒色の男もいささか驚きあわてているようであった、だが顔色は変えなかった。彼はゆっくりと落ちつきはらって、見ても見えない青い剣を握った腕を大きく伸ばした、まるで一本の枯枝のようだ。首を伸ばして、鼎の底をじっと見ているようであった。腕が突然、曲げられたかと思うと、青い剣はいきなり彼の背後から打ちおろされた、剣がふれると同時に首が落ちて、鼎の中にころげ込み、ポンという音がして、雪白の水しぶきが空中に向って、同時に四方にとびあがった。
黒色の男の首が水にとび込むや否や、そのまま王の首におそいかかり、ガブリと王の鼻に咬みつき、ほとんど咬み切るばかりであった。王は堪えられずして一声「アイヨー」と叫んで口を開けると、眉間尺の首はその機に乗じてもがき脱れ、くるりと向き直ると王の下顎に死ぬほどの力をこめてガッチリ咬みついた。彼等二人とも咬みついて離さないばかりか、ありったけの力を用って上と下に引っぱったので、引っぱられた王の首はもう口を合わせることもできなかった。そこで二人は餓えた鶏が米をついばむように、一しきりそこらじゅう目茶目茶に咬みあらした。咬まれた王の首

剣をいれた箱をわたしの膝の上においた。『これは雄剣だ』と父はいった、『お前これをしまっておけ。明日、わしはこの雌剣だけを大王のところへ持って行く。もしわしが行ったまま帰ってこなかったならば、わしはきっともうこの世にはいないのだ。お前は身ごもってもう五、六か月になるではないか、悲しむことはない、子供が産まれたら大切に育てるのだ。成人になったときに、お前は子供にこの雄剣を手渡して、大王の首を斬らせ、わしのために仇を討たせるのだ！』と」
「その日、父は帰ってこなかったのですか？」と眉間尺はせき込んでたずねた。
「帰ってこなかった！」と母親は冷静にいった、「わたしはあちこち聞いて廻ったが、まるで消息はなかった。後に人からきいたところでは、お前の父のつくった剣に、最初に血を飲ませたのは、つまりその人自身――お前の父親であった。そして父親の幽魂が祟りをするのを怕れて、その胴体と首とを別々に、門前と裏庭に埋めたということだ！」
眉間尺は突然、全身が猛火に焼かれるようで、自分でも毛髪の一本一本からまるで火の玉がきらめき出すような気がした。彼の二つの握りこぶしは、暗がりの中でガクガクと鳴りひびいた。
母親は立ち上って、寝台のところの木板を取りはずし、寝台を下りて、松明をつけ、裏口に行って鋤をとってきて、それを眉間尺に渡していった、「掘ってごらん！」
眉間尺は心臓がドキドキした。だが落ちついて一鋤一鋤しずかに掘って行った。出てくるものはみな黄土であったが、およそ五尺ばかりも深く掘って行くと、土の色が少しちがってきた、ボロボ

がみな顔を伏せて行った。そのときちょうど眉間尺は一輌の黄色い蓋をかけた大きな車が走ってくるのを見た。真中には一人の飾った衣裳を着た太っちょが坐っている。胡麻塩のアゴ鬚で、小さな頭だ。腰のあたりにはどうやら彼の背中にあるのと同じ青い剣を佩びているのが見える。

彼は我知らず全身がサッと冷たくなった。だがすぐまた灼けるように熱くなった、まるで猛火に焼かれたかのように。彼は手を肩さきに伸して、剣の柄を握りしめるとともに、脚をふみ上げて、ひれ伏している人々の首と首との隙間を跨いで進んだ。

だが彼は五、六歩進んだばかりで、もんどり打って倒れた。それは誰かが突然、彼の片方の脚をつかんだからである。ころげた途端に一人の乾からびた顔の青年の身体を圧しつぶした。彼は剣の先が青年を傷けることを怕れ、吃驚して起きあがって見ると、肋の下にひどい拳骨を二つくらった。彼はとやかく争っている暇はない、再び街路の方をみてみると、黄色い蓋の車はもう通りすぎていたばかりか、それを取り巻く騎馬の武士たちも一団になって駆け抜けていた。

路ばたの一切の人々もみな立ちあがった。乾からびた顔の青年はだが眉間尺の着物の襟を堅くつかんで、手を放そうとせず、彼のために大事な丹田を圧しつぶされた、必ず保証してくれ、もし八十歳にならぬうちに死ぬようなことでもあれば、身代りになって命を償ってくれという。閑人たちがまたすぐに二人を取り巻いて、ボンヤリと見物していた。だが誰も何とも口をきかない。そのうち誰かがそばから二こと三ことからかったが、それは完全に乾からびた顔の青年に加勢するもので

あった。眉間尺はこんな敵にとっつかまってしまい、全く怒るにも怒れず、笑うにも笑えず、ただわびしさを覚えるだけであった。だがその場を脱れるすべはなかった。こんなふうで一鍋の粟が煮えるくらいの時間がたって、眉間尺はもう焦立ってきて全身が火を吹いた。見物人はだがもとのまま減りもせず、尽きぬ興味をもっているかのようであった。

前方の人垣がゆれた。一人の黒い色の男が押し分けて出てきた、黒い鬚、黒い眼、痩せて鉄のようだ。彼は何もいわず、ただ眉間尺に向って冷やかにちょっと笑いかけると、手をあげてそっと乾からびた顔の青年の顎を突きあげ、そして彼の顔をじっと見据えた。その青年もまた彼の顔をしばらく見ていたが、いつしかそっと手をゆるめて、姿を消した。その男も姿を消した。見物の者たちもつまらなさそうに散って行った。ただ数人のものがなおも眉間尺に、年齢、住所、家には姉がいるかなどとうるさくたずねたが、眉間尺は一切、彼等にとり合わなかった。

彼は南の方へ歩いた。城下がこんなに人混みでは、いつ間違って誰かを傷けるか分らぬ、いっそ南の城門の外で国王の帰りを待って、父の仇を討とう、あのへんなら土地も広いし人通りもまれだし、全くあばれるには都合がいい、と考えて。このとき全城下の人たちは国王の遊山、儀仗、威厳について議論し、自分は国王の栄光を見ることができたということから、どんなに低くひれ伏したか、それは国民の模範とすべきものである等々ということに及んで、まるで蜜蜂のように群がりならんで、そのままずっと南の城門近くまできて、やっと次第に静かになった。

彼は城外に出て、一本の大きな桑の木の下で腰をおろすと、饅頭を二つ取り出して空腹を充した。食っているときフト母親のことを思い出して、覚えず眼と鼻がすこし酸っぱくなった、だがその後は別に何ということもなかった。周囲はだんだん静かになって行き、やがて自分の呼吸もハッキリ聞えるまでになった。

空の色はいよいよ暗くなり、彼もいよいよ不安になってきた。眼に力をいれて前方を見わたしたが、国王の帰ってくるような気配はすこしも見えない。城内へ野菜売りに出た村の人たちが、それぞれに空かごをかついで城門を出て家に帰って行った。

人通りが途絶えてずいぶんたってからだが、突然あの黒色の男が城内からひょいと飛び出してきた。

「逃げろ、眉間尺！ 国王がお前をつかまえようとしているぞ！」と彼はいった、その声はまるで梟のようだ。

眉間尺は全身がぶるッとふるえて、魔法にかかったようになり、すぐ彼のあとについて逃げ出した。後では飛んで走っていた。彼は立ち止まると、しばらくのあいだは喘ぐ息をしずめていたが、そのときもう杉林のあたりへ来ていることが分った。後方の遠いところに銀白色の線紋様がある、月がもうそこから出てくるのだ。前方にはただ二つぶの燐火のようなあの黒色の男の眼の光があるだけだ。

「あなたはどうして私を知っているのですか？」と眉間尺はひどく驚いたようすでたずねた。

「ハハ！ わしは前から君を知っている」とその男の声がいった、「わしは君が雄剣を背負って、君の父のために仇討ちをしようとしていることを知っている、わしはまた君が仇討ちに失敗したことも知っている。失敗したばかりか、今日もう密告した者がいて、君の仇はとっくに東の城門から宮中へ帰り、君を逮捕する命令を出したのだ」

眉間尺は思わず悲しくなった。

「ああ、母親の溜息は無理もない」と彼は低い声でいった。

「だが母親はことの半分しか知らない。彼女はわしが君のために仇を討ってやることを知っていない」

「あなたがですか？ あなたが私のために仇を討って下さろうというのですか、義士？」

「ああ、君はそんな呼び方でわしを買いかぶってはいけない」

「では、あなたはわれわれ孤児と寡婦とに同情して？……」

「ああ、少年よ、君はもうそんな汚辱を受けたい方をもち出さないでくれ」と彼はきびしく冷やかにいった、「義侠とか同情とか、そのようなものは、もう夙くにきれいさっぱりなくなって、今ではインチキ債権の資本になってしまった。わしの心の中には君のいうようなそんなものは、これっぽちもない。わしはただ君のために仇を討ってやるだけのことだ！」

「わたくしめは先程、一人の異人に出あいました。不思議な術をつかいますので、大王さまをお慰めいたすことができようかと存じまして、とくに申しあげるのでございます」

「何だと?!」王はいった。彼の言葉はいつも大へん短い。

「それは黒く痩せた、乞食のような男でございます。青い着物をきて、円い青い風呂敷包みを背負うて、口にはわけの分らぬ歌をうたっております。人がその男にたずねますと、その男は、手品を上手につかう、空前にして絶後、世に並びなきものだと申すのでございます、誰もこれまで見たものはないけれども、これを見たら退屈を解きほぐし、天下太平になると申すのでございます。ところが、ではそれをやって見ろとみなが申しましても、その男は承知しないで、第一には金竜が必要だし、第二には金鼎が必要だと申すのでございます。……」

「金竜？ 朕がそれじゃ（金竜は皇帝の象徴とされる）。金鼎なら朕がもっておる」

「わたくしめも、全く左様に考えるのでございます。……」

「連れてまいれ！」

という声の終わらないうち、四人の武士がその小姓と一しょに大急ぎで駈け出した。上は皇后から、下はお伽の臣に至るまで、それぞれうれしそうな顔色になった。彼等はみなこの芸当が退屈を解きほぐして、天下太平になることを願った。もしうまく行かなかったとしても、それはその乞食のような黒い痩せた男が禍を受けるのだから、彼等はただ連れてこられるのを待ってさえいればよ

かった。

あまり時間はかからなかった、六人のものが金の階の方へ急いでやってくるのが見えた。先頭は小姓で、後づめが四人の武士、真中に黒い色の男がはさまっている。近くまでくると、その男の着物は青く、鬚、眉、頭髪は黒かった。痩せこけて頬の骨、眼の周りの骨、眉の骨はみな高く突き出ていた。その男がうやうやしげに跪いてひれ伏したとき、果して背なかには一つの円い小さな風呂敷包みのあるのが見えた。青い色の布で、上にはちょっと暗紅色のシミが浮き出している。

「申せ！」と王はいらだたしそうにいった。彼はその男の道具が簡単であるのを見て、こいつは何も面白い芸当はできないだろうと思った。

「臣の名は宴の敖者と申し、汶々郷で生長いたしました。若いときから職業をもたなかったのでありますが、晩年になって立派な師匠に出あい、手品を教えてもらいました、これは子供の首でございます。この手品は一人だけでは使えないので、必ず金竜の前に、金鼎をおいて、清水をいっぱい注ぎ、獣骨でつくった炭を用いて沸かし、そこへ子供の首を入れるのでございます。水が沸騰すると、この首は波のまにまに上下し、さまざまな舞踏をし、また妙なる音を出して、よろこびの歌をうたいます。この歌と踊りとは大王が御覧になれば退屈を解きほぐし、万民が見れば、天下太平になるのでございます」

「やってみろ！」と王は大声で命令した。

間もなく、牛を煮る大きな金の鼎が庭におかれ、水をいっぱい注ぎ、下には獣骨でつくった炭をつめ、火がつけられた。黒色の男はその傍らに立っていたが、炭火が赤くなるのを見ると、背中の風呂敷包みを解いてあけ、少年の首を取り出して、両手で捧げて高くあげた。その首は眉が秀で、眼は切れ長、真白い歯並みと紅い唇をしている。顔には笑いを帯びている。頭髪はかき乱れて、まるで一陣の青い煙のようだ。黒色の男は首を捧げながら四方に向ってぐるりと一回転すると、手を伸して鼎の上まで持って行き、唇を動かして何やらわけの分らぬことを二こと三こといったかと思うと、そのまま手を放した。ボトンという音をきいたのは、首が水の中に落ちた音である。水しぶきが同時にはね上り、それは完全に五尺以上もあったが、それから後は一切が静かになった。

ながい間、何の気配もなかった。国王がまずイライラし出した、つづいて皇后と妃、大臣、側役人たちもみな焦立ち、ちんちくりんの小人たちはもう冷笑をしはじめた。王は彼等の冷笑をみると、自分が馬鹿にされているような気がして、武士を顧みて、彼等に君主をあなどる不逞の人民を牛を煮る鼎の中に投げ込んで煮殺すように命令しようとした。

だがその時、水の沸騰する音がきこえた。炭火も燃えさかり、その黒色の人を反映して、赤黒く、まるで鉄が焼けて赤みを帯びたようにした。王はやっとまたこちらに顔を向けた、その男はもう両手を天に向けて伸ばし、眼をあてなきものにそそいで、舞踏しながら、ふと鋭いキイキイ声を出して歌い出した。

ハハ愛だ、愛よ愛よ！
愛だ、血だ、誰か独りならん。
民草は闇を行くのだ、独裁者はヒヒと笑う。
彼は用う百の首、千の首をだ、万の首を！
我は用う一つの首をだ、そして万夫なし。
一つの首を愛するのだ、血よアア！
血よアアだ、アア、アア
アア、アアだ、アア、アア！

歌声に随って、水は鼎のフチから湧き上った、上の方は尖り、下の方は広く、まるで小山のような形である。だが水の尖端から鼎の底まで、止むことなく旋回運動がつづく。その首は水の上下するに随って、ぐるりと旋回し、一方でまたくるくると自己回転をする。人々には何だか首がそうやって面白がって笑顔をしているようにも見えた。しばらくたって、突然、逆水の遊泳にかわった。渦まきに梭をつきとおすようで、水しぶきははね返って四方に飛び散り、庭中に一しきり熱い雨をふりそそぐ。一人の小人が急にアッと叫んで、手で自分の鼻づらをなでた。彼は不幸にして熱い湯をかぶって、苦しさにたえず、とうとう叫び声を出さずにはいられなかったのである。

あった。眉間尺はこんな敵にとっつかまってしまい、全く怒るにも怒れず、笑うにも笑えず、ただわびしさを覚えるだけであった。だがその場を脱れるすべはなかった。こんなふうで一鍋の粟が煮えるくらいの時間がたって、眉間尺はもう焦立ってきて全身が火を吹いた。見物人はだがもとのまで減りもせず、尽きぬ興味をもっているかのようであった。

前方の人垣がゆれた。一人の黒い色の男が押し分けて出てきた、黒い鬚、黒い眼、痩せて鉄のようだ。彼は何もいわず、ただ眉間尺に向って冷やかにちょっと笑いかけると、手をあげてそっと乾からびた顔の青年の顎を突きあげ、そして彼の顔をじっと見据えた。その青年もまた彼の顔をしばらく見ていたが、いつしかそっと手をゆるめて、姿を消した。その男も姿を消した。見物の者たちもつまらなさそうに散って行った。ただ数人のものがなおも眉間尺に、年齢、住所、家には姉がいるかなどとうるさくたずねたが、眉間尺は一切、彼等にとり合わなかった。

彼は南の方へ歩いた。城下がこんなに人混みでは、いつ間違って誰かを傷けるか分らぬ、いっそ南の城門の外で国王の帰りを待って、父の仇を討とう、あのへんなら土地も広いし人通りもまれだし、全くあばれるには都合がいい、と考えて。このとき全城下の人たちは国王の遊山、儀仗、威厳について議論し、自分は国王の栄光を見ることができたということから、どんなに低くひれ伏したか、それは国民の模範とすべきものである等々ということに及んで、まるで蜜蜂のように群がりならんで、そのまままずっと南の城門近くまできて、やっと次第に静かになった。

間もなく、牛を煮る大きな金の鼎が庭におかれ、水をいっぱい注ぎ、下には獣骨でつくった炭をつめ、火がつけられた。黒色の男はその傍らに立っていたが、炭火が赤くなるのを見ると、背中の風呂敷包みを解いてあけ、少年の首を取り出して、両手で捧げて高くあげた。その首は眉が秀で、眼は切れ長、真白い歯並みと紅い唇をしている。顔には笑いを帯びている。頭髪はかき乱れて、まるで一陣の青い煙のようだ。黒色の男は首を捧げながら四方に向ってぐるりと一回転すると、手を伸して鼎の上まで持って行き、唇を動かして何やらわけの分らぬことを二こと三こといったかと思うと、そのまま手を放した。ボトンという音をきいたのは、首が水の中に落ちた音である。水しぶきが同時にはね上り、それは完全に五尺以上もあったが、それから後は一切が静かになった。

ながい間、何の気配もなかった。国王がまずイライラし出した、つづいて皇后と妃、大臣、側役人たちもみな焦立ち、ちんちくりんの小人たちはもう冷笑をしはじめた。王は彼等の冷笑をみると、自分が馬鹿にされているような気がして、武士を顧みて、彼等に君主をあなどる不逞の人民を牛を煮る鼎の中に投げ込んで煮殺すように命令しようとした。

だがその時、水の沸騰する音がきこえた。炭火も燃えさかり、その黒色の人を反映して、赤黒く、まるで鉄が焼けて赤みを帯びたようにした。王はやっとまたこちらに顔を向けた、その男はもう両手を天に向けて伸ばし、眼をあてなきものにそそいで、舞踏しながら、ふと鋭いキイキイ声を出して歌い出した。

「あなたはどうして私を知っているのですか?」と眉間尺はひどく驚いたようすでたずねた。

「ハハ! わしは前から君を知っている」とその男の声がいった、「わしは君が雄剣を背負って、君の父のために仇討ちをしようとしていることを知っている、わしはまた君が仇討ちに失敗したことも知っている。失敗したばかりか、今日もう密告した者がいて、君の仇はとっくに東の城門から宮中へ帰り、君を逮捕する命令を出したのだ」

眉間尺は思わず悲しくなった。

「ああ、母親の溜息は無理もない」と彼は低い声でいった。

「だが母親はことの半分しか知らない。彼女はわしが君のために仇を討ってやることを知っていない」

「あなたがですか? あなたが私のために仇を討って下さろうというのですか、義士?」

「ああ、君はそんな呼び方でわしを買いかぶってはいけない」

「では、あなたはわれわれ孤児と寡婦とに同情して?……」

「ああ、少年よ、君はもうそんな汚辱を受けたいい方をもち出さないでくれ」と彼はきびしく冷やかにいった、「義俠とか同情とか、そのようなものは、もう夙くにきれいさっぱりなくなって、今ではインチキ債権の資本になってしまった。わしの心の中には君のいうようなそんなものは、これっぽちもない。わしはただ君のために仇を討ってやるだけのことだ!」

「わたくしめは先程、一人の異人に出あいました。不思議な術をつかいますので、大王さまをお慰めいたすことができようかと存じまして、とくに申しあげるのでございます」

「何だと?!」王はいった。彼の言葉はいつも大へん短い。

「それは黒く痩せた、乞食のような男でございます。青い着物をきて、円い青い風呂敷包みを背負うて、口にはわけの分らぬ歌をうたっております。人がその男にたずねますと、その男は、手品を上手につかう、空前にして絶後、世に並びなきものだと申すのでございます、誰もこれまで見たものはないけれども、これを見たら退屈を解きほぐし、天下太平になると申すのでございます。ところが、ではそれをやって見ろとみなが申しましても、その男は承知しないで、第一には金竜が必要だし、第二には金鼎が必要だと申すのでございます。……」

「金竜? 朕がそれじゃ(金竜は皇帝の象徴とされる)。金鼎なら朕がもっておる」

「わたくしめも、全く左様に考えるのでございます。……」

「連れてまいれ!」

という声の終わらないうち、四人の武士がその小姓と一しょに大急ぎで駈け出した。上は皇后から、下はお伽の臣に至るまで、それぞれうれしそうな顔色になった。彼等はみなこの芸当が退屈を解きほぐして、天下太平になることを願った。もしうまく行かなかったとしても、それはその乞食のような黒い痩せた男が禍を受けるのだから、彼等はただ連れてこられるのを待ってさえいればよ

かった。

あまり時間はかからなかった、六人のものが金の階の方へ急いでやってくるのが見えた。先頭は小姓で、後づめが四人の武士、真中に黒い色の男がはさまっている。近くまでくると、その男の着物は青く、鬚、眉、頭髪は黒かった。痩せこけて頰の骨、眼の周りの骨、眉の骨はみな高く突き出ていた。その男がうやうやしげに跪いてひれ伏したとき、果して背なかには一つの円い小さな風呂敷包みのあるのが見えた。青い色の布で、上にはちょっと暗紅色のシミが浮き出している。

「申せ!」と王はいらだたしそうにいった。彼はその男の道具が簡単であるのを見て、こいつは何も面白い芸当はできないだろうと思った。

「臣の名は宴の敖者と申し、汶々郷で生長いたしました。若いときから職業をもたなかったのでありますが、晩年になって立派な師匠に出あい、手品を教えてもらいました、これは子供の首でございます。この手品は一人だけでは使えないので、必ず金竜の前に、金鼎をおいて、清水をいっぱい注ぎ、獣骨でつくった炭を用いて沸かし、そこへ子供の首を入れるのでございます。水が沸騰すると、この首は波のまにまに上下し、さまざまな舞踏をし、また妙なる音を出して、よろこびの歌をうたいます。この歌と踊りとは大王が御覧になれば退屈を解きほぐし、万民が見れば、天下太平になるのでございます」

「やってみろ!」と王は大声で命令した。

彼は城外に出て、一本の大きな桑の木の下で腰をおろすと、饅頭を二つ取り出して空腹を充たした。食っているときフト母親のことを思い出して、覚えず眼と鼻がすこし酸っぱくなった、だがその後は別に何ということもなかった。周囲はだんだん静かになって行き、やがて自分の呼吸もハッキリ聞えるまでになった。

空の色はいよいよ暗くなり、彼もいよいよ不安になってきた。眼に力をいれて前方を見わたしたが、国王の帰ってくるような気配はすこしも見えない。城内へ野菜売りに出た村の人たちが、それぞれに空かごをかついで城門を出て家に帰って行った。

人通りが途絶えてずいぶんたってからだが、突然あの黒色の男が城内からひょいと飛び出してきた。

「逃げろ、眉間尺! 国王がお前をつかまえようとしているぞ!」と彼はいった、その声はまるで梟のようだ。

眉間尺は全身がぶるッとふるえて、魔法にかかったようになり、すぐ彼のあとについて逃げ出した。後では飛んで走っていた。彼は立ち止まると、しばらくのあいだは喘ぐ息をしずめていたが、そのときもう杉林のあたりへ来ていることが分った。後方の遠いところに銀白色の線紋様がある、月がもうそこから出てくるのだ。前方にはただ二つぶの燐火のようなあの黒色の男の眼の光があるだけだ。

ハハ愛だ、愛よ愛よ!
愛だ、血だ、誰か独りならん。
民草は闇を行くのだ、独裁者はヒヒと笑う。
彼は用う百の首、千の首をだ、万の首を!
我は用う一つの首をだ、そして万夫なし。
一つの首を愛するのだ、血よアア!
血よアアだ、アア、アア
アア、アアだ、アア、アア!

歌声に随って、水は鼎のフチから湧き上った、上の方は尖り、下の方は広く、まるで小山のような形である。だが水の尖端から鼎の底まで、止むことなく旋回運動がつづく。その首は水の上下するに随って、ぐるりと旋回し、一方でまたくるくると自己回転をする。人々には何だか首がそうやって面白がって笑顔をしているようにも見えた。しばらくたって、突然、逆水の遊泳にかわった。渦まきに梭をつきとおすようで、水しぶきははね返って四方に飛び散り、庭中に一しきり熱い雨をふりそそぐ。一人の小人が急にアッと叫んで、手で自分の鼻づらをなでた。彼は不幸にして熱い湯をかぶって、苦しさにたえず、とうとう叫び声を出さずにはいられなかったのである。

がみな顔を伏せて行った。そのときちょうど眉間尺は一輛の黄色い蓋をかけた大きな車が走ってくるのを見た。真中には一人の飾った衣裳を着た太っちょが坐っている。胡麻塩のアゴ鬚で、小さな頭だ。腰のあたりにはどうやら彼の背中にあるのと同じ青い剣を佩びているのが見える。

彼は我知らず全身がサッと冷たくなった。だがすぐまた灼けるように熱くなった、まるで猛火に焼かれたかのように。彼は手を肩さきに伸して、剣の柄を握りしめるとともに、脚をふみ上げて、ひれ伏している人々の首と首との隙間を跨いで進んだ。

だが彼は五、六歩進んだばかりで、もんどり打って倒れた。それは誰かが突然、彼の片方の脚をつかんだからである。ころげた途端に一人の乾からびた顔の青年の身体を圧しつぶした。彼は剣の先が青年を傷けることを怕れ、吃驚して起きあがって見ると、肋の下にひどい拳骨を二つくらった。彼はとやかく争っている暇はない、再び街路の方をみてみると、黄色い蓋の車はもう通りすぎていたばかりか、それを取り巻く騎馬の武士たちも一団になって駆け抜けていた。

路ばたの一切の人々もみな立ちあがった。乾からびた顔の青年はだが眉間尺の着物の襟を堅くつかんで、手を放そうとせず、彼のために大事な丹田を圧しつぶされた、必ず保証してくれ、もし八十歳にならぬうちに死ぬようなことでもあれば、身代りになって命を償ってくれという。閑人たちがまたすぐに二人を取り巻いて、ボンヤリと見物していた。だが誰も何とも口をきかない。そのうち誰かがそばから二こと三ことからかったが、それは完全に乾からびた顔の青年に加勢するもので

の髪の毛までが、昨日ほどに黒くてきれいではないといった。幸にして彼女が彼の膝の上に坐わって愛嬌をまきちらし、特別に七十何回もつねったので、やっとのことで眉の間の皺がだんだんほぐれた。

午すぎてから、国王は起きあがると、何だかまた機嫌がわるかったが、午飯をたべてからは、すっかり怒った顔つきになってしまった。

「ああ！　つまらない！」と彼は大きなあくびを一つしてから、大声でいった。

上は皇后から下はお伽の臣（コッケイなことをいって機嫌をとる者）にいたるまで、この情勢をみると、みな手足のおき場もない気持ちであった。白鬚の老臣の説教や、ちんちくりんの小人のオドケ話も、王はもうとっくに聞きあきてしまった。近ごろでは綱渡り、竿昇り、玉投げ、逆立ち、刀呑み、火噴きなどなどの奇妙な芸当、どれもみなさっぱり面白くない。彼はいつでもカンシャクを爆発させようとしている。一たび爆発すると、青い剣をとって、何かちょっとした間違いをさがし出しては、何人でも手討ちにしたがる。

こっそり抜け出して宮廷の外で遊んでいた二人の小姓が、いまし方、帰ってきて、宮廷内の誰もの愁わしそうな困った様子をみると、いつもの禍事がまたやってくるのを知った。一人は驚愕して顔が土色に変ったが、一人はしかし大丈夫だというふうに、あわてず騒がず、国王の眼の前に駈けよって、平伏しながら、いった。

「すみません。だがあなたはどうやって私のために仇を討って下さるのですか？」

「君がわしに二つのものをくれさえしたらいい」と二つぶの燐火の下の声がいった、「その二つのものかい？　聞くがいい、一つは君の剣だ、二つには君の首だ！」

眉間尺は奇妙なことだと思って、ちょっと疑ったけれども、しかし決して驚きはしなかった。彼が一とき黙っていると、

「君はわしが君の生命と首とをだまし取るのではないかと疑ってはいけない」と暗がりの中の声はまたきびしく冷やかにいった、「このことはすべて君次第だ。君がわしを信じるなら、わしはやる、君が信じないなら、わしはやめる」

「だがあなたはどうして私のために仇を討って下さるのですか？　あなたは私の父を知っているのですか？」

「わしは前から君の父を知っているが、それは前から君を知っているのと同じだ。だがわしが仇を討ってやろうというのは、決してそのためにではない。利口な少年よ、君にいっておこう。君はわしがどんなに仇討ちがうまいかを知らないのか。君の仇はつまりわしの仇で、彼もまたつまりはわしなのだ。わしの霊魂にはこんなにもたくさん、人とわしとが加えた傷がある、わしはもう自分自身を憎んでいるのだ！」

暗がりの中の声が止ったとき、眉間尺は手をあげて肩先から青い色の剣を抜きとり、手順に後項

遊び人の国王だけは面白いと思ったらしく、そのうえ彼女がいう秘密情報があったらしく、彼を一そう興がるようにさせた。その夜、彼女は大いに感じ入って、第九番目の妃

[illegible]から前方にキラッと輝くと、首なし男の青い背の上に落ちたが、同時に黒色の男に変じた。「ハハハハー」と笑って彼女は片手で剣をあつかいながら、肩間尺の首をとらんとせず、その隙に死んで屋根の向こうに二度飛び、そしてあたりに銳く笑った。

笑い声がその中に消えるとともに、奥の方から数人の[illegible]が、一人の[illegible]を引っぱりながらやって来た。[illegible]の[illegible]の[illegible]の

「すみません。だがあなたはどうやって私のために仇を討って下さるのですか？」

「君がわしに二つのものをくれさえしたらいい」と二つぶの燐火の下の声がいった、「その二つのものかい？　聞くがいい、一つは君の剣だ、二つには君の首だ！」

眉間尺は奇妙なことだと思って、ちょっと疑ったけれども、しかし決して驚きはしなかった。彼が一とき黙っていると、

「君はわしが君の生命と首とをだまし取るのではないかと疑ってはいけない」と暗がりの中の声はまたきびしく冷やかにいった、「このことはすべて君次第だ。君がわしを信じるなら、わしはやる、君が信じないなら、わしはやめる」

「だがあなたはどうして私のために仇を討って下さるのですか？　あなたは私の父を知っているのですか？」

「わしは前から君の父を知っているが、それは前から君を知っているのと同じだ。だがわしが仇を討ってやろうというのは、決してそのためにではない。利口な少年よ、君にいっておこう。君はわしがどんなに仇討ちがうまいかを知らないのか。君の仇はつまりわしの仇で、彼もまたつまりはわしなのだ。わしの霊魂にはこんなにもたくさん、人とわしとが加えた傷がある、わしはもう自分自身を憎んでいるのだ！」

暗がりの中の声が止ったとき、眉間尺は手をあげて肩先から青い色の剣を抜きとり、手順に後項

窩から前方にサッと刎ねると、首は地面の青い苔の上に落ちたが、同時に剣は黒色の男に渡した。

「ハッハッ！」と笑って彼は片手で剣を受けとり、片手では頭髪をつかんで、眉間尺の首をとりあげ、その熱い死んだ唇に向って二度接吻し、そして冷やかに鋭く笑った。

笑い声がそのまま杉林の中に散りひろがると、奥の方では同時に一群の燐火のような眼光がキラめいて、たちまち接近し、フウフウという飢えた狼の喘ぐ息がきこえ、はじめの一口で眉間尺の青い着物を引きちぎった、二口目には身体が全部なくなり、血痕もまたたく間に舐めつくし、ただ骨を噛み砕く音だけがかすかにきこえた。

一番先頭にいた一匹の大きな狼が黒色の人に向って跳びかかって行った。彼が青い剣を一ふりすると、狼の頭は地面の青い苔の上に落ちた。別の狼たちははじめの一口でその皮を引きちぎった、二口目には身体全部がなくなった、血痕もまたたく間に舐めつくし、ただ骨を噛み砕く音だけがかすかにきこえた。

彼はやがて地上の青い着物を拾いあげて、眉間尺の首を包むと、青い剣と一しょに背中に負い、身をひるがえして、暗がりの中を王城に向って悠々と歩いて行った。

狼たちは立ちどまって、肩を聳やかし、舌を出し、フウフウと喘ぎながら、緑色の眼光を射て彼が悠々と去るのを見ていた。

彼は暗がりの中で王城に向って歩き、鋭い声をしぼって歌を唱った――

ハハ愛だ、愛よ愛よ！
青い剣を愛した、一人の仇は自分で死んだ。
みんな続けさまだ、独裁者たちは。
一人が青い剣を愛した、アアそれはひろがる。
首と首との取りかえだ、二人の仇は自分で死ぬ。
一人は死んだぞ、愛よアア！
愛よアアだ、アア、アア、
アア、アアだ、アア、アア！

〔訳者付記〕この歌は、この後もでてくる歌と共に、ハッキリした意味をつかんで訳すことができない。訳者はこれらの歌の意味について原作者にたずねたことがあるが、「その中にある歌はみなハッキリした意味を出していない」といい「変てこな人間と首が歌うものですから、われわれのような普通な人間には解りかねるはずです、云々」という手紙をもらった。

三

遊山も国王には面白い思いをさせなかった。そのうえに途中で刺客がいるという秘密情報があったりして、彼を一そう興ざめにして帰還させた。その夜、彼は大へん怒りっぽくて、第九番目の妃

の髪の毛までが、昨日ほどに黒くてきれいではないといった。幸にして彼女が彼の膝の上に坐わって愛嬌をまきちらし、特別に七十何回もつねったので、やっとのことで眉の間の皺がだんだんほぐれた。

午すぎてから、国王は起きあがると、何だかまた機嫌がわるかったが、午飯をたべてからは、すっかり怒った顔つきになってしまった。

「ああ！　つまらない！」と彼は大きなあくびを一つしてから、大声でいった。

上は皇后から下はお伽の臣（コッケイなことをいって機嫌をとる者）にいたるまで、この情勢をみると、みな手足のおき場もない気持ちであった。白髪の老臣の説教や、ちんちくりんの小人のオドケ話も、王はもうとっくに聞きあきてしまった。近ごろでは綱渡り、竿昇り、玉投げ、逆立ち、刀呑み、火噴きなどなどの奇妙な芸当、どれもみなさっぱり面白くない。彼はいつでもカンシャクを爆発させようとしている。一たび爆発すると、青い剣をとって、何かちょっとした間違いをさがし出しては、何人でも手討ちにしたがる。

こっそり抜け出して宮廷の外で遊んでいた二人の小姓が、いまし方、帰ってきて、宮廷内の誰もの愁わしそうな困った様子をみると、いつもの禍事がまたやってくるのを知った。一人は驚愕して顔が土色に変ったが、一人はしかし大丈夫だというふうに、あわてず騒がず、国王の眼の前に駈けよって、平伏しながら、いった。